

## 学 校 と は 何 か

— その意義と役割を中心として（実践的立場から） —

足利市立筑波小学校教諭 山 本 光 子

## 1 はじめに

教師となり十年が無我夢中のうちに過ぎてしまった。何とか一人前の教師となれるよう努力をしてきたつもりだが、研究授業や研究会等のたびに、また、問題児童等の指導にあたるたびに、自分の力不足を痛感するこのごろである。この無力感を克服し、今後の職務の目あてをつかむためにこの論文を書いてみようと思ったわけである。学校教育の原点を考え直し、根本的に私たちのなすべき仕事をみつめていきたい。そこから、これからの学校の意義と役割がくみとれたら幸いである。

## 2 私の体験から

過去の私は（現在でもあるが）教師としてふさわしく仕事に専念していたであろうか。思いおこしてみると「そうだった」とは言えないところが多分にある。ただ言えることは“ひとりひとりの考えを大切にしよう。子どもの行動から、子どもの心をくみとろう”、ということを経験の信条としてきた。しかし“ひとりひとりを生かす指導を”、と考えながらもことばのはしはしに、だれかをつぶすようなことを言っていないだろうかと思つて反省することがしばしばであった。教師としてよりも一個の人間として生き、人の気持ちを理解できる、人の苦しみをわが身と考えられるような人間でありたい。そして、その上で教師としての専門的技術を身につけていったなら、どんなにすばらしいであろうと思う。

## 3 学校教育の現在像

現在34名の児童を受け持っている。ひとりひとりがいろいろな点で違っている。いつも黙っている子、すぐに泣き出す子、何ごとにも口を出したがる子、強情な子、ひとりよがりの子、理解のはやい子・おそい子と様々である。そんな子どもたちの育った家庭・地域の特性など、教室の中だけでは解決することのできないいろいろな問題等、ひとつひとつとり上げていったら際限なくある。それらを理論的のみでなく、臨床学的に裏づけしながら子どもたちの行動科学的なものまで学んでいくことが使命であり、とりくむべき命題であると考えている。また、学校は、生徒自らの生活する場所であり、教師が生徒の生活を指導し観察してその中から各自の能力を発展させる場でもある。この精神にもとづいて、生徒の生活に関係あるすべてのところが教育の場である。カリキュラムの内容によって生徒たち各自の自由な生活の実現できる空間と雰囲気を持ち、教師がその能力を十分に発揮できる施設をもつとてなくてはならない。しかし、現在の学校では、“家庭科の実験で炭火を使い、一酸化炭素中毒になる”、という事件が新聞にのるくらい学校の施設・設備は一般家庭より何段階かずつおこなれている。今時、炭火を使って煮たきしている家庭がどれほどあるであろうか。完全性と指導効果を考えてみても、もうすこし早く施設設備を改善する必要があると思う。理

振法その他の法律により、充実の計画はたてられているようではあるが、すべて後手後手にまわっているような感じがする。同じ義務教育でありながら、地域の経済状態などにより差が大きいのは考えものである。指導要領にもとづいて指導される学校にあって、学校差や地域差があまりにありすぎることは、教育基本法の本質にも反するのであろう。すべての子どもたちが均等な条件で教育を受けられるように条件を整備することが必要である。そして、すべての教師が、授業研究およびその他の研修のみに専念できる学校体制が全国の学校でとれたならば、子どもたちの能力もずっと開発され、学習効果も上がると思う。いろいろな事務や雑用に使われる時間が多いのが現実の学校ではないだろうか。特に小規模校では、校務分掌の仕事が多い。小規模校の学級担任は、学年学級の仕事のすべてをひとりあるいは二人でやらねばならない。プリントその他のことについて大規模校では、同学年担任の教師が数人いれば、その教師たちが分担して仕事を行い、ひとりの仕事はずっとへるわけである。そんな大規模校には、事務職員なども配置され事務処理も少ないわけである。このような不合理が行われているのが現実である。

#### 4 私の考える学校教育の構想—学級経営を中心として

学校とは何か。まず、ちなみに「学校」について国語辞典や百科辞典でひいてみると「人々が集まって一定の組織・方法で教えるところ」「学生・生徒が集まって教育を受けるところ」とある。また、学校は自然社会としての家庭や地域集団の生活の中での自然的・機能的な教育では形成することのできないいわば特殊の知識や思想や技能を、人為的・計画的に教えるために生まれた機関である。そして、民衆が学校に期待したものは、日常生活の中、労働生活の中では習得することのできない文字の知識であった。国として期待したものは、村落や部族の習慣や風俗による教育によって得られるものとは異質な、外来の宗教や国家的な理論や新しい技術であった。そして、現代的意味での学校は、文字の学習および文字による学習と切りはなしては考えられなくなっている。学校の本質は、専門の教師によって教育が行われることと、個人的でなく集団的に教育が行われることの二点にあるということが出来る。情報過多ともいえるこのごろの社会にあって、これをいかに収集し処理し、これに対応でき得る人間を形成していくかが、一つの大きな問題であると考えられる。つまり、テレビ等に流されない自己の生活(学習)をどんなふうにも生み出すかが、現代の子どもたちに課せられた問題点ではないだろうか。受け身の学習から積極的に学ぼうとする意欲づけを学校の教育において十分指導し、その解決を自らの中で発見的・計画的に実践化するというように、その発展的学習を自主的に実行できるような創造的構造を作っていくならば、知識を得る喜び、問題解決の喜びを知ることができるのではないだろうか。例えば、毎日子どもたちが無意識に見ているマンガその他の番組をただ漠然と見ているのではなく、それ等を見たあとで「不思議に思ったこと」「はじめて知って驚いたこと」「～ことがあったが、本当にそんなことがおこるのだろうか」など書きとめておくメモ帳のようなものをいつもテレビの部屋におき、その都度書きこめるようにしておく。そして、それを次の日、学校で発表する機会を持つ。全員が全部発表することが時間的に無理であれば、発表する分担のようなものをきめて、数人ずつでも発表していくというようなシステムを作ってみたらどうだろうか。その中には、理科や社会の時に役立つような知識や、ドラマな

どから受けた感動などでは、その主人公の生き方や考え方などから道徳的なもの、人生観というようなものまで話し合えるようになると思う。ふだんの授業の中で地名やできごとなどがでてきた場合、「あっ、そこはあのテレビ番組の時にでてきたところだね。そこには、こんなこともあったよ。」というようにすぐに考えが浮かぶ子どもがいる。体育で側転や前転をやっていると「あの番組の中で、あの人がやった側転や前転は、とてもきれいだったね。」というように、娯楽番組として笑いながら見ている中にも、そこから学習に必要なところを吸収し、取り出している児童もいる。そういった意味では、テレビで得た影響がすばらしい示範となっているのである。そうして得た知識からは、知的形成にとどまらないで、人間形成を旨とすることもできるのである。そうして得たものは、教えられたものではなく、知的好奇心によって求められた知識である。新奇なものに驚きを持ち、新しい知識に問題を感じこれを求め、これを経験しようとする積極的発動的な心構えこそ、主体的な心構えの基盤である。主体的に知ったことはなかなか忘れがたいものである。そんな指導が行われ更にひとりひとりの子どもを生かすための指導に専念し、子どもを見つめ、子どもの生活の中に入りこみ、子どもたちが主体的に学ぶことを味わえるように努力できるようになったら、学習のみでなく生活に対する構え方などへも指導の手がのび、生き生きした学級が生まれることと思う。

だまされてよくなり — 悪くなってはだめ  
いじめられてよくなり — いじけてしまってはだめ  
ふまれておきあがり — 倒れてしまってはだめ  
いつも心は燃えていよう — 消えてしまってはだめ  
いつも瞳は澄んでいよう — 濁ってしまってはだめ

左の詩は、坂村真民氏が「なやめるS子」と題してうたわれたものである。集団の成員のひとりひとりが相互に敬愛しあっている学級では、おくれた子・不幸な子がすべての人からはげまされ、あたたかく包まれ、生きる喜び、学習する喜びを味わっていることを基本条件と考える。学級経営の目標は、それが、

教室経営の問題であれ、人間関係の問題であれ、究極のところは、個人のもっている能力水準にまでいかに高めるかにあるといつてよいと思う。つまり学級経営も学校経営も学校教育の一環であり、経営の目標は教育の目標に集約されるからである。したがって学級経営は、「個」に帰結する。一方、学級は心理性と社会性の両面の性格をもつ一つの集団である。それが教育の営みである人間形成によい結果をおよぼす集団であるためには、健全な社会意識を、集団の成員が心的安全を保つ場ではなくてはならない。そして、毎日の授業の中で遅進児の発言を大事にし、その中に含まれている学習を深め、きっかけとなるようなものを見つめとり上げて授業に生かすとともに、終礼時にも賞讃し、意義づけるなどの配慮をしていきたい。そのような配慮が授業を生き生きとさせ、あたたかい学級をつくるものである。おくれた子・不幸な子への思いやりは学習に関してあるのではない。より多く教師の手にかかる子どもに、より深い関心をはらう教師の態度が、健全な社会意識を育てる学級経営に通じる。健全な社会意識の育っている学級は、それが授業にはねかえり個別的な学習の成立を強化し、個の集団への反映との相補性の中で、のぞましい人間が形成されると考える。

## 5 学校の役割を考える

急速に発展する現代社会にあつて新しい知識はつぎつぎにつくられ、教育に課せられる知識の量

は増加する一途をたどるばかりである。すなわち、教育制度上で、また教育内容の上で更に、教育方法面において、その改善に努力を傾けつつある。文部省でも昭和42年に中央教育審議会に、今後の時代における教育のあり方を展望し、長期の見通しに立った基本的な文教施策について答申を求めている。その答申の要点を上げるとともにそこから学校の役割を見出してみたいと思う。

### ① 生涯教育の立場から

学校教育は、すべての国民に対してその一生を通じる人間形成の基礎として必要なものを共通に修得させるとともに、個人の特性の分化に応じて豊かな個性と社会性の発達を助長する最も組織的・計画的な教育の制度である。

と述べているように、学校は一般社会において必要な知識や技能を身につけたい時にできる各種の専門学校や、会社の研修機関等の知識がスムーズに受け入れられるような基礎的な知識と学習の方法を学ぶことも一つの役割である。

### ② 人格形成への貢献

教育は、人格の完成をめざすものであり、人格こそ人間のさまざまな資質・能力を統一する本質的な価値であることは変わることはない原則である。人間形成とは、人間が環境とのかかわりあいの中で、自分自身を主体的に形作っていく過程であるが、教育とはそのような過程において、さまざまな作用を媒介として望ましい学習が行われるようにする活動である。

どんな社会の変化にも対応できる精神力（家庭においてつちかわれる部分が多いはずだが）と知識や技術を積極的にとり入れる基礎と健康なからだづくしをする機関である。

### ③ 能力の開発

家庭教育・社会教育・学校教育のそれぞれの役割を確立させる必要性を強調している。そしてこれからの学校教育では、すべての国民に対して多面的な人間形成の基礎をつちかうという本来の役割を適切に果たすべきである。そして、人間形成を特定の能力の伸長だけで評価することなく、多面的・総合的な発達をいっそう重視すること。

子どもたちの精神的資質を人間として全面的に発達する方向に導くことに努めなければならない。そして教師自身も、仕事に愛情をもち、有用な知識・技能を確実に獲得させ、正しい物の見方・考え方・感じ方・行い方を指導できるように努めなければならないと思う。

学校にあっては、

- (ア) 全体の子どもが、ひとりひとりのこらず実力をつけること。
- (イ) すべての子どもが、物事をよく見る力、物事についてよく考える力、ゆたかに正しく感じる力、物事を道理にあったようにやってのける力を育てる。
- (ウ) 自然の美や人間の真実をよく味わわせそれらをさまざまな形に表現した芸術・文字を正しく受けとらせ、彼ら自身にも何かの創造活動をさせることによって、人間味のある人に、健康な情操に豊んだ人々にする。
- (エ) すべての子どもが、「わたし」をだいにするばかりでなく、「他人」をだいにするような、自我の強さと社会連帯感の豊かさを養っていく。
- (オ) これからの日本人は、国に対してどう考えたらいいのか、今までの日本の歴史の歩みや日本

人の生活・風俗・習慣・意識については、どう反省していったらいいのかというようなことを、まっすぐに考えていく態度の土台を養っておくことが必要である。

そして、家庭にあっては、学校生活以前に必要なよい習慣づくりをもとに考え、整理・整とんのしつけとか、最後までやりとおし、あとしまつまでやろうとする根気力とか十分にしつけ、学校での学習が自主的に効果的に学べるような素地をつくる必要がある。このように家庭と学校が互いの役割を分担し、協力しあって子どもを教育していったならば、人間性豊かな明日の社会を明るくする人づくりができるのではないだろうか。特に小学校においては、学ぶための心がまえや習慣づけの時期であり、教師とのふれあいによって知ることの喜びを求め、集団社会での根本的なあり方を覚える大切な時期であると思う。この時期にゆがんだ生活態度や考え方をもったならば、その子どもの将来へも大きく影響を与え、そこを正すことは容易なことではない。その意味で、小学校の教師の責任は重大である。

## 6 これからの学校を考える

高度化する情報化社会・科学に対応することはもちろんであるが、それよりも、人間的な触れ合いによって教育していくことが今後の学校にのぞまれるようである。教師が児童・生徒を大切にひとりひとりの発言をないがしろにしないように常に教育生活の根底におくことが学習への意欲を高める第一歩となると思う。そして、期待される人間像に描かれたような人間の集団と、この社会が成ったならどんなにすばらしい世の中となるであろう。そんな社会の一員を目標として教育することが我々に課せられた問題である。義務教育のうちに、真の自由を身をもって理解させ、実行できる学校生活を送らせたい。そうすることによって、卒業後の社会のいろいろなできごとに対して強く生きる考え方をもつちかしておくことができるのだと思う。しかし、学校のみで全部を望むことは不可能であろう。〈三つ子の魂百までも〉のことわざがあるごとく、小さいころからの家庭でのあり方が小学校入学前に子どもの性格を形成しているとも言える。社会的なあり方は学校で家庭との連絡を密にし、考え方の交流を数多くすることにより、ある程度は達成できるであろう。

どんな学力が未来を作る学力なのか、どんな子どもの学習態度を父母や教師は求めて行けばいいのか。保護者に問いかけ、ともに話し合い授業を公開して、具体的に子どもを素材に説明し、教師の構えを保護者に訴えることが必要であろう。

## 7 おわりに

ここにまとめたことはすべて希望であり、こうありたいと望む〈像〉である。これから進むべき私の教員生活への指針として考えをまとめたにすぎません。女としてのせまい視野をいくらかでも拡げ、自分のからにとじこもらないようにするためにまとめたものです。諸先生方の御指導をいただければ幸いです。